

第17回（平成29年度 第1回） 東近江市市民協働推進委員会 会議録

◆開催日時 平成29年6月22日（木）午後7：00～9：00

◆開催場所 東近江市市役所新館 319会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾昌峰、森井源藏、細居悦子、太田裕子、森下瑠美、築山清美、
北井香、大林恵子、大橋正徳、板倉元、横田真也

事務局 総務部理事 川南、まちづくり協働課 曾羽、久保、村井
(傍聴者：0人)

◆議事

- 1 市民協働推進計画の進捗管理と検証・評価の方法の検討について
- 2 「若者のまちづくりへの参加を促進するには」Aチームからの報告
- 3 「共に考え、共に創る わがまち協働大賞」について

◆会議録

開会

【事務局より開会の挨拶】

(理事挨拶)

本日は、平成29年度の第1回の市民協働推進委員会を開催させて頂きましたところ、委員の皆様には大変ご多用のところ、ご出席を賜り誠にありがとうございます。日頃から、皆様方には、東近江のまちづくりに、それぞれのお立場から格別のお力添えを賜っておりますことを厚くお礼を申し上げます。

さて、本市では、市民や市が互いの特性を生かしながら協力し、地域の課題解決を図る「市民と行政の協働」を基本的な考え方として、まちづくりを進めています。

簡単に「協働」と言いましても、市民と行政、立場の異なる者同士が共通の問題意識を持って、共に行動しようとすることは、容易なことではありませんが、東近江には、「惣村自治」の歴史や近江商人の「三方よし」の精神など、昔から「協働」の下地があり、今日では、自治会、まちづくり協議会、市民活動団体等、様々な形の市民活動が、地域社会に息づくようになりつつあります。

このような中で、「協働のまちづくり条例」や「市民協働推進計画」を実効性あるものにし、総合的に推進するための仕組みや制度などについて、皆さまには、本当に熱心にご検討いただいております。これまでの委員会では「わがまち協働大賞」や「地域担当職員制度」など「市民協働推進計画」に掲げられている施策についてご議論いただき、その議論を踏まえて制度化や実施につながった取り組みもごございます。

また、昨年からは、まちづくりへの関わりが少ない「若い世代」をターゲットに、まちづくりへの参加促進に向けて、中学生や子育て中の母親を対象に現場に足を運んで話を聞く機会を持っていただいたり、ラウンドテーブルの仕組みづくりにもご尽力いただいております。

今後も、これらの取り組みをさらに充実したものにするための検討や新たに取り組むべきことについて、ご意見を頂戴できればと思います。

引き続き、東近江のまちづくりについて、皆様方の豊かなご経験とご見識を賜りたいと存じますので、どうか忌憚のないご意見、ご提言を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

【委員長より挨拶】

今年度第1回目ということで、昨年に引き続きよろしくお願い致します。

今年度も昨年度から引き続いて若い世代をどういう風にまちづくりに巻き込んでいくかという話をやっていただきます。前回中学生とやっていただいた時の話はかなりインパクトがあって、田園風景を中学生が残してほしいという話をいろんなところで話すと、結構大人達が考え込む、この前市長に話したところ、市長も喜んでいました。やっぱり若い世代が考えている価値観っていうのは、実は大人を変えていく原動力があるかもしれません。そういう世代がもっとまちとの引っかかりとか、いろんな人との交わりとか、皆さん方との交流などがもっと起こっていくと、いろんなことが起こっていくのではないかと、この前の報告で僕自身は非常に感じました。今日もAチームの報告をいただけると嬉しいですので楽しみにしております。今日もよろしくお願い致します。

【今年度の委員会について】

- ・資料1に基づき事務局より説明

(委員長)

次回からはわがまち協働大賞にシフトしていきますが、今年度は推進計画の進捗管理をどう自主的に実施していくかということと、若者の取組を有機的にどう接続していくかということと、ラウンドテーブルともどうつなげていくかということについて議論しなければいけないなと思っています。だいたい5回くらいの委員会を考えておりますので、よろしくお願い致します。だいたい1年間の姿が見えたところで、早速今日の1つ目の議題に入りたいと思います。

本日は、市民協働推進計画の進捗管理と検証・評価の方法の検討についてということで、まず資料2に、なぜこういう進捗管理を考えるかということについて事務局で試案を作っていたいておりますので、ご説明いただきます。

【市民協働推進計画の進捗管理と検証・評価の方法の検討について】

- ・資料2に基づき事務局より説明

(委員長)

試案について説明していただきましたが、その中でアウトプットやアウトカムという言葉が飛び交ってますので、こういう評価をなぜしなければいけないのかということと、どういう風に考えたら良いのかということについて、話題提供メモを作ってきましたので、少しだけ話をさせていただいて、皆さんと意見交換したいと思います。

<話題提供メモに基づき委員長より説明>

最近こうして計画を作ったら、進捗管理をやりましようとなってるんですね。皆さんも他のところでいろいろ関わっておられて、このような進捗管理があると思うのですが、僕が他に関わっているところで、これが実質化されているところってあまりなくて、「儀式」や「アリバイ」型なんです。条例に書いてあるからやりましようという感じになっていて、本当にそれが良いものにするためというか、本当にチェックをして次のアクションにつなげていくというところがあまり感じられない評価がほとんどです。何のためにやってるんだろうと。だからここでも、例えば今まで計画に書かれたものが「やってますよね」「まあいいでしょう」と言えばそれはそれで簡単なんですけど、それで本当にいいのかというところがあって、本気で東近江市として目指したい・作り出したい地域の姿に本当に肉薄するためのチェックというか、みんなでもう一度知恵を寄せ集める。資料メモに「変える勇氣」と書いてますが、我々みんなで作った計画ですが、計画って完璧なわけがない。ただ、変えるってなかなかしないんですね。本来は上手くいかなければ変えなければいけないし、議論をしてもっと良いものになっていくのであれば変えた方がみんなにとってハッピーなんです。あまり出来の悪いものをずっと守るよりも、ちょっとこういう風に変えてみようとか「変える」という風になっていかなければいけない。よく PDCA と言いますが、日本のこういう取組って結構 PDPD なんです。Plan して Do して、また Plan して Do してみたいところで、一応チェックやアクションがあるようで、実はなくて、もしかしたら PDDD なのかもしれないですね。一回計画を立てたらずっとやり続けるみたいなのがあって、そこをみんなでチェックをしたり、改善につながる議論をできればと思っています。

資料メモの2点目に、アウトプットとアウトカムと書いています。さきほど事務局の説明にもアウトカムという言葉が出てきました。アウトプットというのは、分かりやすくいえばその事業で出た単純な数です。例えば、参加者数とかがよく使われます。最近、行政の事業に関してすべて評価されてるんですが、基本的にはアウトプットの数、よくやるのは費用対効果で、例えば“50万円をかけてイベントを開催したときに500人来たら1人あたり受益者単価は1000円です。”みたいな割り出し方を、行政の事務事業評価でやるわけです。要は、便益を受けた人がこれだけいて、それに対してコストがこれだけかかりましたという費用対効果を出すんですね。これがアウトプットで、中身は関係ないですね。

あるまちで、HIVの啓発事業をやるということがあったんですが、事業担当者が広報をすっかり忘れていて1週間前くらいに気づいたんです。担当者はすごく焦って、いろんなところにチラシを配ったけどいまいち芳しくない。行政的には若い大学生とかを集めてHIVの啓発事業をしたくて、避妊具を配るといような協力ももらっていたという面白い事業なんです。100人の定員が集まらないということで、地域の女性会というところをお願いをしてみたら、結果その場に集まったのがおばあちゃんばかりになったということがありました。これは、アウトプット指標でいくと100人集まったからマルなんです。費用対効果はばっちりという評価になります。だけど、おばあちゃん達が避妊具をいぶかしげに見ていて、なかなか配れなくて、実質化してない訳です。おばあちゃん達も頼まれたから来てやったという、いわゆる動員な訳です。本来その事業が10万円かけて作り出したい姿って

というのは、動員のおばあちゃん達に聞いてほしいわけではないんですよね。若い世代の人たちに少しでも啓発したいということでいくと、そういう若い人たちをこういう風に変えたいんだとか、こういうことを知ってほしいというアウトカム、本来こういう状態を作り出したという指標からすると0点な訳です。

今までの評価はどちらかというと数に縛られきて、アウトプットで何人来たから良かったよねという話が一般的なんですね。ただ動員で100人来たからOKという世界と、10人しか来なかったけど、その10人がいろいろ考えてくれてそういう姿になったというのでは、どっちが事業として本質的に良かったかというのは、評価のあて方によって違うわけですね。ですから、そういう意味では、アウトプットとアウトカムというのは両方使い分けながら、ある意味でアウトプットの指標も当然大事だし、アウトカムの本来意図していた変化、そういう意味ではアウトカムを立てるためにはビフォーアフターがいるということです。要は、今のこの状態から、こういう状態にもっていければいいということですよ。

さっき作ってもらった成果目標で、例えば「わくわくこらぼ村」のところに書いてある「市民活動の認知度が高まる」というのは、今高くないからこういう機会知る人が多くなってほしいということですよ。これはアウトカムとしてはいいんです。ただ、それをどうやって測るかってことが大事なんですね。結論からいくとこの委員会でそういうことを考えましょうということです。アウトプットなら来た人の人数とか非常に分かりやすいんですが、そこに来た市民活動に全然関係ない人たちがどういう反応をしてくれたかということ測れるようなアンケートであったり、捉えられるようなインタビューをしてみるとか、何でもいいんです。そういう指標をどう持てば良いかということこの委員会では議論したいと思います。

そういうビフォーアフターと自分たちのアウトカム、要は作り出したい世界とか、この事業の狙いとか目的というところに、どれだけ肉薄していているかということ。ここに書いてあるような市民活動の認知度がこの事業で飛躍的に高まるというのは幻想な訳ですよ。これをやったから東近江市の全市民の認知度が高まるわけではないので、少なくともこの事業に来てくれた人はこうだとか。だけどあまりにも認知度が高まらない、興味関心を持ってもらえないということであれば、このあり方を見直さなければならぬですよ。場所が悪いのか、やり方が悪いのかということにつながっていく。だからそういう風なことがチェックできるような声とか反応とか数とか状態とかをどうやって表すかっていうことを皆さんと考えたいと思います。具体的な成果目標を作らなければいけないということです。そういう意味ではアウトプットの分析をしっかりやるということも大事なんですね。

「人が少ないイベント」って皆さんはどのような風な言い方をしますか。自分がやったイベントの参加者が少ないときに、僕はよくお天気のせいにしてたりします。今日は寒いし…とか、今日は雨が降ってるし…とか、他にイベントいっぱいあるし…とか言っちゃう。自分たちが傷つかないようにするためにそういう言い訳をして済ませちゃうことがよくあります。でも、これって本当かということです。自分たちのイベントが本当にそういう影響で人が少ないのかということが分からないですよ。だから、アウトプットの分析もしっかりやらないと、都合の良い解釈をしてしまいがちなんです。そのあたりのところも気をつけられたらいいなと思います。

今私が言っていることを全部が完璧にできるということはないですし、非常に手間がかかるのですが、こういうことを意識した指標作りを考えましょうということです。でも、指標化できないものや数字で表せないものもあると思います。そういうものは言葉や状態で表すとか、インタビューしてみるとか、話を聞いてみるとか、というようなことでいいと思います。

例えば、地域担当職員制度のところに書いてある「まちづくり協議会メンバーと信頼関係ができていくかどうか」を測るって難しいですよ。アンケートを取ったり、実際にまち協の人たちに聞いてみるというのも1つかもしれません。ただ、アンケートの中でデジタル化できるとすれば、信頼関係ができていくかという問いが仮に聞けるとすれば、この数字が80%以上担保したいという言い方はできるかもしれません。それを、どういう風に指標化をしてどう評価するのか、どれくらいだったら良いのかということも合わせて考えるということが、チェックをしていく中では非常に大事だろうと思います。

その中で、あるまち協だけが低いという結果の時は、そこに何かの問題があるのかもしれません。そうすると、何らかのサポートや手立てが必要だということです。それは、まち協の方に限界や課題があって、もうちょっとこういうサポートがあれば…とか、いろんなものが見えてくるかもしれません。もしかしたら地域担当職員の個人的な資質の問題かもしれません。そんなときは、こういうことって起こりうるよね、だったらこういう研修をしてあげないといけないなということが分かるかもしれません。こうやって横で比べるものがある場合、いろんなまち協さんとの関係の中で、他のところはだいたい8割いっているのに、あるまち協さんだけ5割だという場合は、ここに何かの問題が発見できる可能性があるわけです。

これの一番大切なのは改善支援だということです。何やってるんだ！と責めるのではなくて、それをどう組織的にフォローしていけばもっと上手くいくのかとか、どんな改善策があるのかとかが見えてくると思います。それをどんどんと改善をしてアクションにつなげていく、PDCAのサイクルをきちんと回していくということだと思います。ぜひ、改善支援という眼差しで見えていくということができればいいなと思います。この委員会としては、今みたいなコンセプトでやり方も含めて合意をしていただけると、次回以降、具体的に成果や指標の設定の議論をしていきたいですし、どうしてもこれは難しいなというものは難しいで置いておけば良いと思います。どうしようもないものはそのままでも良いんです。こういうことがこの委員会で始まっていくと、行政と事業者の事業評価も、単なるアウトプットからどんどんアウトカム評価に変わっていくはずなんです。それってまちにとっては非常に良いことなんです。やりっ放しの事業が少なくなったりとか、形式的なものがどんどん少なくなっていくはずなので、アリバイじゃなくて実質的な評価ということや、今後この委員会ですうい風に進めていくかということをお話をさせていただきました。

皆さん方からご意見やご質問など、いろんな声を聞かせていただければと思いますがいかがですか。

(委員)

委員長のお話、その通りだと聞かせていただきました。具体的にどうやっていくかこれから考えていかなければいけないですが、総論的にすごく良いと思いました。

(委員)

私も仕事上いろんな評価をしなければいけないのですが、耳が痛いというか、その通りだなと思って聞いていました。具体的な話になるのですが、事業の評価はそのようにするとして、それが基本施策の目標みたいなところに照らし合わせていくような感じに評価としてはなっていくということでしょうか。

(委員長)

イメージとしては、基本的な方向性はぶれないと思うんです。例えば、もし、わくわくこらぼ村が「広く市民活動への理解を深める」というこの事業の目的を達成できていないという判断になった場合は、こらぼ村は手段ですから、この手段をどういう風に変えていけば目的が達成できるかという見直し案をみんなで考えるということになると思います。施策という大きいところではなくて、事業という手段をどのように見直していくかという観点だと思います。

(委員)

1つずつ見ていくということでしょうか？例えばこらぼ村であれば、なぜアピアなのかとか、たくさんの人に集まってもらおうと思うと、先ほど1100人が来られたという話でしたが、場所が大きくなればなるほど集まる人数が違ってくると言われてますので、東近江市の人口にしたら、何割くらいの人に来てくれれば達成なんだろうとか。

(委員長)

そうですね。これも厳しくいえば、1100人分のどれくらいが市民活動に関係のない人かという点もあります。こらぼ村は、市民活動を知らない人に触れてもらうというのと、団体同士が交流するという2つの目的があるので、一概に言えませんが、1つ目の目的でいうとどれくらいの割合の人が参加すれば妥当なのかというアウトプットの目標設定も必要になってきますよね。また、質というか属性なども決めても良いかもしれません。そうすると、アピアで開催するやり方のメリットだけでなく、補えないものがでてきたときに、じゃあこの部分はこういうやり方をした方が良いよねということが見えてくるかもしれない。そういうことをそれぞれの事業でやってみるということです。ちなみに何事業くらいあるのでしょうか。

(事務局)

基本的な施策が40くらいあるうちに、そこにメインの事業がぶら下がってくるという感じですか。

(委員長)

全部といっではじめから飛ばしすぎると大変なので、中心的な施策を選んでやっていきましょう。少なくとも事業をしている人にとって否定じゃなく、改善につながるチェックということが大事ですね。その議論やチェックをしている中で、新しいアイデアとか、もっとこんなことしたら良いんじゃないかということが出てくると思うんですよ。それが施策化・事業化したら良いです。なので現場感というか、地域担当職員制度に関していうと、地域担当職員だけに聞いてもだめで、まちの人にもしっかり聞く術をちゃんと持たなければいけないですね。

(委員)

先ほどのHIVの啓発事業で、関心がないから集まらなかった、天気が悪かったというこ

とでしたが、関心が低いからそういった啓発事業をする訳で、対象者ではない人が集まってきたというのは少し悪かったかもしれませんが、動員というのも必要だと思うのですが。

(委員長)

動員が悪いわけではなくて、対象の人の関係ですね。だから認知されていないことを知らせないといけないというのは、みんな知らないから来ないということはあるので、何らかの形で引っ張ってくるということは大事なことです。それが事業の対象と合致していれば良いんです。ですがさっきの話は、行政の縦のラインで声をかけやすいおばあちゃん達を呼んで、お茶を濁していたというのが良くなって、きっかけが仮に動員だとしても、それが来てくれた人に響けば、事業としては悪くないと思います。動員という手法はできれば使いたくないのですが、まちの呼びかけ方の作法としては間違っていないと思います。誤解がないように言うと、それが対象や事業の目的との関係で、ミスマッチを起こすと、100人を埋めるためにやったという風になるのであまり良くないとなるんです。

他の方もいかがでしょうか。指標を設定するのは非常に難しいですが。

(委員)

私が仕事をしていたときは、確かに人数でした。観光客が何人来たとか、数字で提示すると分かりやすいんですね。

(委員長)

今の観光客が来るという数字はアウトプットなんですよ。だけど、観光客が来て何を狙うかという、例えば観光消費額というものが裏で思いとしてあるんです。観光客がただ来てくれて賑わえば良いというのであればそれでいいんですが、観光客が来て、ゴミが増えてお金も落としてくれないというのであれば、観光客なんて来ない方が良いという話になるので、観光客が来て賑わいがという点でいうと、たぶんそこには観光消費額という話があるわけです。だとすると、何人来たというのがアウトプットなんですけど、そうではなくて、呼び込みをすることで、今まではお茶しか買ってくれなかったのがお菓子も一緒に買ってくれるようになって、1人あたり150円だった消費額が550円になったというのがアウトカムなんです。その狙いというのは暗黙知に持っていて、観光客にたくさん来てほしいという言葉には、ゴミをまき散らしてほしいと思っているのではなくて、観光客が来てくれれば賑わってお金が落ちるという想いがあって、たくさん来てほしいという数字になるわけです。いくら1万人来てくれたとしても、ゴミを落とす人ばかりであればゴミ処理費用がかさむだけで失敗な訳です。そうではなくて、暗黙知に持っている「お金を落としてくれる人に来てほしい」ということを、どういう風に見える化させるかということが必要なのだと思います。

(事務局)

以前地方創生の仕事をしていたのですが、今まさに国の方も補助金を出すときに、アウトプットではだめでアウトカムの指標を出せと言われて、みんな頭を悩ませているところです。交付金の申請を出すには、アウトカムの指標で提出してと言われるのですが、どう評価するのかとか、ましてや交付金というのは単年度の話なので、単年度で何ができるのかということに全国で頭を悩ませているということで、行政的にはこの指標の設定の仕方が大きな課題となっています。良い案が出ればそれに越したことはないのですが、手間がどれだけかかるかという部分があって難しい点もあるのですが。

(委員長)

国も数値的に処理をしたいので、重要業績評価指標 KPI という数字を出したいんです。分かりやすいんですよ。だけど、今おっしゃったようにそんな指標はそうそうなくて、しかも大変なんですよ。だから、ここでは数字ではないアウトカムでもいいと思います。無理矢理数字だけで表そうと思うと非常に大変なので、言葉で表すことができる指標や表現を実験してみたら良いなという風には思います。数字で表せるものはできるだけ数字で、表せないものは状態の変化みたいなものをビフォーアフターで言語化できれば良いですね。ただ、そこにあんまりコストもかけられないこともあるので、その辺りを簡便に皆さんのセンスで考えたいです。

(委員)

委員長がおっしゃることもあるのですが、事業数が相当多そうですね。2カ月に1回くらいのこの委員会で他の事業もしていく中でこの議論もしようとする、時間的に厳しいんじゃないかと思います。なので、事務局で主な事業をピックアップしていただくとかしないと現実的ではないように思います。

(委員長)

そうですね。今までのやり方は A3 横の資料にあるようにやってる・やっていない・一部実施みたいなものを確認するだけで済ませてきているのですが、基本的にはこれでいいことになっているので、これでいいんです。ただ、これではいけないよねということなので、じゃあこの中で今年度は5事業やりましょうとか、10事業やりましょうとか決めて考えれば良いなと思っています。どれくらいの数が良いでしょうか。

(委員)

4か5でしょうか。施策1つずつとか。私たちにも目に見えた事業も入れないといけないですね。

(委員長)

基本施策ごとだと4つですね。

(委員)

もちろん数は絞らないといけないのですが、選別の仕方というのが非常に重要なと思います。それぞれの柱から1つずつとかそういうのではなくて、一体ものの施策の中で一番効果の出る事業などの重要度で選定しないと、やりやすいものをして目的から外れてきてしまうのではないのでしょうか。せつかくここで議論をするのであれば、この事業について評価してほしいという視点がなければもったいない作業になってしまう気がしますがいかがでしょうか。

(委員長)

なんとなく5つくらいかなというイメージがありますが、仮に5つだとしてもどう選ぶのか。今の話でいくと、例えば困難を抱えている事業とか、成果が出ていないと思われる事業から考えないと、本質的な改善という意味でいくと意味がないだろうというご指摘ですね。非常に大事な視点だと思います。そういう事業ってあるんですか。

(事務局)

どれもがんばってやっていたらと思うのですが、例えば地域担当職員制度であれ

ば、始まって1年でこれからどうしていこうかというところが非常に悩ましいところです。中間支援の充実としては、中間支援組織ができて5年になるのですが、これからいろいろな動きがある中で、未来に向かってどういう形で進めていけば良いかと思い悩んでいる事業はあります。市としては広聴も悩んでいる1つです。広報はさまざまな取組をしているのですが、市政懇話会などもあります、それ以外で市民の声を聞く方策がなかなかないというのが現状です。

(委員長)

事業ベースで考えられるものでないと難しいかもしれませんね。5つくらいという合意がいただけるのであれば、最終的には事務局と私で決めていきたいのですが、皆さんで気になる事業やぜひやりたいといった事業はありますか。いろんな見方があると思います。この事業は長くやっているからとか、短いからこそ最初のうちに課題を知っておきたいといったことでもいいと思うのですが、いかがでしょうか。

(委員)

事業を絞るのもいいと思うのですが、形式的なチェックから実質的なものにするのであれば、市民の声を聞くというのが一番大切だと思います。いろんな事業の中で参加者に「どうしたらいいかな」とかそれとなく聞いておいて、こういった場で発表していくと、市民の声が聞こえるということにつながるのではないかと。それをいかに生かすか、改善していけるか、日頃から頭に置いておくことで徐々に良くなっていくのかと思います。

(委員長)

現場の声が大事だということですよ。広聴ってどう声を聞くのかが難しいんですが、今までは審議会や懇談会といったオフィシャルな場の声しかなかったわけです。事業参加者のひとりのつぶやきは1市民の声として、なかなかオフィシャルに取り上げていく回路がなかったんですよね。みんな協働でまちづくりをしていこうという意味では、名もなき声がきちんと吸い上げていけるようなことがまちづくりへの参加の1つだと考えると、声の聞き方というのは非常に大事ですので、指標の中にどう取り込んでいけるか、どういう風に仕組みを持たれば、それが貴重な声に変えていけるのかということも考えたいですし、日常的にということも大事なことだと思います。

(委員)

成果目標の指標自体もこの委員会で考えるということでしょうか。行政の仕事をしたことがあると、挙げた目標は一通りできたとする癖がついてしまうんです。挙げたことしか状況や評価ができないとなるのがもったいないと思っていて、例えばこらぼ村であれば、実行委員会が盛り上がり実行委員がそれぞれのまちづくりの現場で活躍したという成果はきっと書けないと思うんです。そういう、指標に漏らしたけど副次的な効果があったというものも拾えたら本当は良いのになと思うんですが、書類にすると難しさがありますね。地域担当職員さんの話が聞けるか分からないですが、何か地元の声が拾えるとか、そういった $+ \alpha$ ができるともっと充実した評価になると思います。

(委員長)

同時に、どうやったら改善につながる指標になるのかということですよ。実態を評価するために状態を切り取るというのは大事なんですが、何を目標にしていくと本質的な目標に

たどり着けるかを考えるということだと思うので、その辺りも知恵を絞っていけばさらにいい事業が生れていくと思います。一般的な行政のチェックシートに載らないようなこともどんどん載せていくといいと思います。

(委員)

この場でできることと、聞いてみないと分からないことがあると思います。この委員会でここを改善していけば良いという話になったときに、事業をされている方が、そんな目的でやっていないとか、そんな目標じゃないしと思っておられる場合もあると思うんです。ここで考えていた以外の部分にもっと力を入れたいと思ってたとか、やってる人たちの声を目的とか内容に取り入れる機会があるのかなと少し疑問で、それが無いとせっかく改善支援という形でやろうとしているのに、離れた感じのものになってしまうのがもったいないと思います。なので、目的とか目標を考えるときに、やられてる方や住民の方と一緒に考える機会がないと意味がないものになるのかなと。

(委員長)

もちろん行政施策ですので一義的な目標というものはあるんですね。基本的にはそれに沿っているかというところは重要なチェックポイントなので、委託を受けている人たちがそれと全く違う方向を向いてやっていたとするとダメですが、これに派生した思いなどは当然聞けばいいと思います。イメージとしては指標をここで決めますが、この委員会としてはどういう風にその情報を収集してくるかというプロセスの中で、ここだけで決めるのではなくて、当事者の人たちの対話であったり、指標をどういう風に測るかの測り方のところで、今の意見は生きてくると思います。

(委員)

この間東京のイベントに行って、その後アンケート調査があったのですが、延べ何人いらっしゃいましたか、商談はどうでしたかなどの一般的な項目があって、でも、そこには書けない自分たちにとってのプラスがすごくあったんです。数字にはできないけれど、こことつながることで今後大きな糧になるだろうなと思える出会いがイベントを通してあったのですが、それをどう主催者に伝えたらいいのかなと思うことがありました。そういったところが評価していただけるようなヒアリングの仕方というのは必要だと思います。わくわくこらぼ村で例えるなら、来られた方や出展された団体にアンケートをとって、数字じゃなくて言葉で書いていただくとか。本当に思いがある人は面倒くさいということではなく、ちゃんとした言葉で書いていただけると思うんです。あまり成果がなかったり、あまり良くなかったと思われたら「良かった」という一言だけとか逆に分かりやすいのかなと、そういう拾い出しの方法も1つあると思います。

想いと違ったりとかいろいろあったりするし、行政の報告書としてはという話も非常に分かります。話が逸れますが、ある大賞を取ろうとしたときに、団体にいる行政マンが書くと全然通らないんですよ。で、どうしてかを聞きに行ったら、「きれいすぎて泥臭さがない」と言われたんです。分かりやすく箇条書きにしたつもりが、全然感情が入ってないから無理ですって、そういう評価をされることもあるんだなと気がついたときに、行政がそういう評価の仕方によって、本当に生の声が聞けるようになっていたり、汗されたものが結果報告書に文章として出てくるのかなと思いました。行政の人って何年か経つとそう

いう癖がついてしまってると思うので、子どもの作文と言われても想いをちゃんと言葉に表して評価できるような評価表が作れるといいなと思いました。

(委員長)

一応行政の文章ですが、この委員会としてやるんだから良いんですよ。今言われたみたいなチャレンジングなシートにして、いろんな想いとかをそこに表現したら良いんですよ。最終的には目的のところに導いたら良いので、評価のための評価ではなくて、この報告を見た人がその事業を体験するという意味合いがあってもいいと思うんです。あんまり盛り込みすぎるのもなんですが、写真が入っても良いし、いろんな人たちの言葉がそのまま入っても良いし、少し工夫をしながらやった方がいいですね。ただ、単なる報告書にならないように厳しいことも言えるというスタンスも大事なので、そういう厳しく見ながらも愛情を持ったシートになるように工夫をしたいですね。

先ほどおっしゃった中で大切なのがアンケートです。アンケートのシートの作り方や何を聞くかみたいな、アンケートの技術も必要です。書くところないじゃんってならないように。昔ある劇団を見に行った時に、終わった後誰ひとり帰らずにみんなアンケートを書いている現場があったんですよ。それって、このアンケートを見て次に生かしてるっていうのを、見に来ている人がみんな知っているからちゃんと書くんですよ。そのアンケートがこういう風に生かされていて、変わっていったっていうことを何回か通っているうちに実感があるので、着実にみんな書くんですよ。だからおっしゃったように、「良かった」という人は良くないんです。アンケートをどう設計するかとか、どういう問いがいいのかみたいなことを少し考えていけると、ただアライヴづくり的なアンケートではなくて、書かれた行間をどう読むかということも非常に大事なポイントですね。

(委員)

非常にボリュームがあって全部はできませんから、先ほどおっしゃったように、できるだけ厳しくも愛情を持って4つか5つかをやるということで。例えば会社ですと、10年間の計画であれば中長期的なスケジュール表みたいなものを作って、10年のうちにこの項目はこの辺りの年度でやるとか、優先順位を決めてやっていくんです。今計画が出来てから3年の中ではこれだけ出来ていて、今年はこの4点くらいを中心にやって、あとのものはこの年度にと決めてスケジュール管理するという形を取った方が今後、委員のメンバーが替わったときでも見やすいと思います。

(委員長)

そういうことも含めて固定的なものやメリハリも含めて考えていければと思います。少し整理をすると、現場に寄り添った改善支援につながる、そして我々的にもチェックが出来て成果につながる指標づくりと、それを明らかにする手法をみんなで開発しましょう。その中では現場からの声やその人達の想いをベースにする。ただ一方で、その土台をベースに、もう少しこうした方が良いよねといった提案や改善支援が言えたり、場合によっては、しんどい思いをしてやりすぎだから肩の荷を下ろしたらどうですか、という改善支援もあるかもしれません。いろんな支援のあり方があると思いますが、そういうスタンスは共有できたと思います。

そういう風な指標やチェックは他にはありませんから、みんなでワイワイガヤガヤやりな

がら作ってみて、それが行政文章っぽくなくても、この委員会として市民が関わる中で自分たちの眼差しでチェックをしたということでもいいと思います。このメンバーでやればそんなに変なものにはならないでしょうし、愛情あふれた、いろんなものが見えるシートになると思いますので、たぶん他のところも真似すると思います。

では、4つか5つくらいの事業を選ぶというのは事務局などと相談して決めさせていただいて、次回に素案を皆さんにお示しします。今日の議論をベースに考えていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

この進捗管理の議論はまだまだ続く議論ですので、今日のところは区切らせていただいて、残りの時間は、Aチームがママともカフェの会を開催されましたので、そのご報告をお願いしたいと思います。

【「若者のまちづくりへの参加を促進するには」Aチームからの報告】

・資料3に基づき事務局より説明

(Aチーム委員)

意外と良かったです。本当にみんな良い意見を持ってるんだなと思いました。

(Aチーム委員)

たまたまそういったメンバーだったのかもしれませんが、本当に良い雰囲気の方々が集まってくださって、一緒に新しくまちづくりの何か事業を興さなくちゃいけないかなといった勢いのある方々でした。そういう人をつなぐことが出来たというのは、今回数字では評価できませんが、数ではない評価という意味では、かなり良い評価なのではないかなと思います。

(Aチーム委員)

総論的には皆さんおっしゃったとおりで、メンバー的にも内容的にも良いものが出来たなと思います。もともと若いお嫁さんというターゲットを絞った理由は、地元に住んでいると、浸かってしまっただけで良いのか悪いのか分からないことがたくさんあって、よその地域から来た奥さん方はいろんな目線があって、良いところも悪いところも含めて、私たちの気がつかないいろんなヒントがいっぱい出る可能性のある人材というセッティングだったと思います。そのねらい所としてはいいメンバーが集まってくださって、ねらい通りの意見が積極的に出ていたこともあり、結果としても良かったと思います。

この試みは次どうしていくか分かりませんが、とりあえず試してみたということで、次の展開や可能性はたくさんある気がします。こういうメンバーを集めていろんなことを客観的に見るというのは非常に効果があるなと思います。まだまだこれから見いださなければいけない課題もたくさんあると思うんですが、この積み重ねによって具体的なものが見えてきて、この地域を良くしていく可能性が作られていくのかなという感じを受けました。

(Aチーム委員)

4人の方が誘い合わせて来てくださったり、図書館のチラシを見て参加されたり、市役所に貼っていたチラシを見て参加してくださって、私としてはそういう世代の人たちが自分から情報を得て来てくださったというところも驚きでした。それから、大変だと言いながらも、地域密着は大事だとか、地域の人とつながることが大事だということがそのまま意見として

出ていて、こんなに若い人がそういうことを思っているんだなというのが、正直すごく嬉しかった。普段もいろんなところで活動されている人たちなので、つながることでさらに活躍してもらえるのではないかなと思って、非常に楽しかったです。

(A チーム委員)

さっき広聴って難しいという話があったと思います。私もいろんな審議委員したり、この委員会の場に来させていただいて、やっぱりまだ緊張するんですね。A チームのあのような場で話しているときには普通にわーっと喋れるのに、やっぱり間違ったことを言ったらダメだとか、ちゃんと喋らないとっていうことは、普通の方って皆さんあると思うんですね。だから意見が聞きにくいんだと思うんです。それを、あのような場を作ること、あの形に固定するわけではないですが、自然と意見が出やすい雰囲気が作れたなというのは、市民が喋りやすい場づくりというのを行政サイドでも考えられる良いきっかけになったなと思います。また、自分たちがこういうところって良いよねって喋ることがまちづくりの参画につながるという気楽なところ、例えば、この商品を買ったら1円募金されますというのがよくありますが、現金で1000円というのは難しいですが、これを1000回買うのだったら出来るかもということと同じで、まちづくりへの参画への気楽さを最後に理解していただけたということも、メリットだったと感じました。

(委員長)

「若い世代のまちづくりへの参加促進」という項目で、1つのテストケースとして中学生と若いママさんというキーワードでやったわけですが、両方良かったですよね。「意外と良かった」というのがまさしくそうだと思うんですが、良い意味で裏切られてるんですよね。若い世代の人が地域のことをここまで語るって、実はそんなに思っていなかった訳です。そういう意味では、地域への想いというのをみんな持っていて、そういうことを語る場所や出す場所がないと。もしかしたらもう1回同じメンバーでやれば、この人達はこういった場を作り続けるかもしれないという予感があるとすれば、この事業としては大成功ですよね。だけど、こういった場がないと、この人達は無関心な市民というレッテルを貼られるわけです。私たちの施策としては、もっと気楽にまちのことをみんな喋りたいんだとか、喋れるとやりたくなるといった導線を、どういう風にみんなで作っていくかということが見えてきたんだと思うんです。導線という意味では、フランクで、お菓子食べながらワイワイやって、まちに詳しい人もいて、まちの良いことも悪いことも喋ってるうちに何かやりたくなってくるという場づくりが見えたとなると、すごい成果だと思いますし、中学生もそうでしたよね。まちのことを思った以上に喋ってくる、これは大人としていろんなことに気づかされたとなると、今回2チームに分かれて現場を作っていただいたことで、発見できたことがあると思います。これを次にどう生かすかというところは、委員会としても議論していきたいですし、ちょっと時間をおいてまたやってみて、もしかするとそこから何か生れるとすると、1つのモデルケースとして出来るかもしれないですね。そういうことがこの場で見えてきて、共有できただけでもやっていただいた意味があると思いますので、本当にありがとうございました。

では、わがまち協働大賞について今年度も計画を作っていただいていますので、その説明を事務局からお願いします。

【「共に考え、共に創る わがまち協働大賞」について】

・資料4に基づき事務局より説明

*昨年度からの変更点…「中学生が選ぶ協働大賞」を新たに追加。Bチーム企画の中で中学生が非常に良い視点を持っていたことや、若い世代がまちづくりに参加するきっかけになるようにという思いから追加した。

*事例募集への声かけ、1次選考、ヒアリング、最終選考についてのお願い

【事務連絡】

・ラウンドテーブル運営委員から、6月26日（月）に開催するまちのわ会議について案内

・ラウンドテーブル運営委員から、運営委員会へのお誘い

・まちづくりネット東近江から、7月10日（月）に開催するチラシ講座について案内

閉会